

あらすじ
「大蛇に魅入られた娘おいのの物語」
～新宮浮島の森伝説～



「好いた同志のうれしい首尾で 心浮島ひとめぐり」(新宮節より)

むかしむかし、新宮は浮島の森のあたりに「おいの」という美しい娘が^{ふたおや}二親と幸せに暮らしていました。「おいの」の父は、^{きこり}樵でした。父のもとへ、毎日昼の弁当を届けるのが「おいの」の役目です。ある日のこと「おいの」は、いつものように弁当を届けに行きました。一緒にご飯を食べようとしたところ^{はし}箸を忘れたのに気づき、森の中へアカメガシワの枝を手折りに行きました。アカメガシワの枝は、お箸にするのにちょうどよかったのです

森の中は、うっそうとして生ぬるい風が吹いていました。

ベキッ！メリメリ！ 物音にわれにかえると、黒い大蛇が目の前に^{かまくび}鎌首をもたげているではありませんか。「おいの」は息をのみ声も出ませんでした。

大蛇の口は、^{はん}般若の^{めん}面のように^さ裂け、赤い舌がチロチロと動く怖ろしい姿です。

大蛇は、すぐに「おいの」を食べようとはせず、その大きな口に「おいの」を^{くわえる}咥えると沢の^{おのれ}茂み^す己^みの^か棲み^{じゃ}処^{がま}「蛇の穴」へゆっくりと姿を隠してゆきました。

急を知り、妻とともに再び森に引き返した父は「蛇の穴」と呼ばれている沢の片隅の穴のそばで両手をつき「せめて、娘の姿をもう一度みせて下さい」と、くり返し願い叫びました。

一陣の風が吹き起ったかと思うと、大蛇が美しいままの「おいの」を^{くわえて}咥えて姿を現しました。「おいの」は、心なしか微笑んでいるように見えました。

そして別れを惜しむようにゆっくり沈んでいき、二度と再び、姿を現しませんでした。

昔噺は年を経て、美しい娘おいのは、池の主^{はし}に魅いられて花嫁となったのだとも、大蛇のいけにえになったのだとも伝えられています。

しかしそれ以来変わらぬは、新宮熊野では、アカメガシワを^{はし}箸の代りに使わなくなったと伝えられていることです。

「おいのみたけりや^い蘭^どの^い沢^どへ^{じゃ}ござれ おいの^{がま}蘭^{がま}の^{がま}蛇^{がま}の^{がま}穴に」



あらすじ作文 杉山みかん
著作権 紀州の民話をオペラに実行委員会